



開かれた包摂社会に向けて

いよいよ大阪・関西万博まで300日を切りました。

大阪商工会議所としても、招致段階から万博を支える経済団体の一つとして、会員企業による建設費寄付などの資金支援、中小企業やスタートアップの出展支援、全国の商工会議所ネットワークを通じた機運醸成、会場だけではなく大阪の街全体で盛り上がるという「まちごと万博」、ポストSDGsに向けた次世代の若者たちの会議や提言の支援など、万博を契機に大阪・関西、さらに日本が更なる発展を遂げられるように取り組んでいます。

万博には160ヶ国以上から数百万人が訪れます。私自身は70年万博の時は小学生でしたが、世界の広さを感じてその後の進路にも影響しました。日本の子供たちや若者たちが世界の多様性を肌で感じて、感受性や包容力を増すとともに、将来の可能性を幅広く考えるようになることを期待します。

他方で、日本の経済社会の現場では、人手不足が深刻化して、せつかくコロナ禍前に回復してきた需要に対応できないとか、増大するインバウンド客を受け入れきれないといった事態も生じています。

少子高齢化に歯止めがかからない中で、外国人労働者への期待も高まっており、国では特定技能制度の業種拡大や技能実習制度の育成就労制度への衣替えなどを進めていますが、外国人の人たちに如何に日本に来てもらって長く定着してもらうか、地域社会に馴染んでもらうかが課題です。

ここで少し難民の話をしたしたいと思います。

昨今のロシアによるウクライナ侵攻などにより、世界で故郷を追われた人の数は1億2千万人を超えたと言われています。島国の日本は陸続きの欧米などに比べて避難して来る難民の数はかなり少ないですが、それでも毎年1万人以上の方が難民認定申請をしています。ただ、欧米諸国に比べて日本は認定が厳しく、年間数十人から数百人の認定しか得られないのが現状です。

私が理事を務めている認定NPO法人難民支援協会では、個人や企業の寄付金をもとに、こうした難民の人たちに食料や宿泊シェルターを提供したり、難民認定申請の手続きを手伝ったりしています。

2022年2月の侵攻以来、日本にも2千6百人以上のウクライナ避難民が戦火を逃れてきて、今なお約2千人が、各地で自治体や学校の支援を得て、働いたり勉強を続けたりしています。私が理事を務めるもう一つの団体である一般財団法人パスウェイズ・ジャパンでは、こうしたウクライナの避難民やシリア・アフガニスタン・ミャンマーなどからの難民の人たちに、各地の大学や日本語学校に紹介したり、奨学金を出したりして、日本で教育を受けて就業する機会を提供しています。



<就活フェア (パスウェイズ・ジャパン提供)>



<企業と学生の交流会 (パスウェイズ・ジャパン提供)>

難民というと、アフリカから欧州に地中海を渡るボートピープルのイメージが強いと思いますが、日本に来る難民の中には、大学の教員やジャーナリスト、エンジニア、シェフなど高度技能人材も多く、本国で活躍していたけれど、偶々誘われて反政府デモに参加したなど何かのきっかけで弾圧や迫害を受け、偶々日本行きビザが取れて逃げてきた人たちです。日本語を勉強して日本の外資系企業や翻訳会社で働いたり、ITエンジニアになったりという例も出てきていますが、まだまだ少数で、多くは支援団体や地域の人々、同国人の助けでぎりぎりの生活をしています。

シリア難民を大量に受け入れて国論が割れたドイツでも、難民を人財と考えてドイツ語教育や職業教育を提供し社会の一員として受け入れる努力を続けています。

人口減少・少子高齢社会を迎えた日本として、このような人財をもっと広く受け入れて、多様性の刺激をもとにイノベーティブな社会にしていくことを考えてもよいのではないのでしょうか。

外国人留学生の日本での就職率が半分を切っていることから、日本企業との就職マッチングをして日本社会で能力や国際感覚を活かしてもらおうとする取組みが関西でも

行われています。企業側でも、人手不足やインバウンド対応、海外展開の必要性などを背景に外国人財を求めるニーズが徐々に高まってきていると感じます。

様々な苦境を切り抜けてきた末、日本で生きることコミットしている難民人財に、他の外国人財と同様又はそれ以上に注目して活躍の場を提供し、大阪・関西さらに日本の多様性・活力に繋げていくことを提案したいと思います。

ウクライナ避難民の受入れで、地域社会や大学・専門学校を含め、日本社会の意識もかなり変わってきたと感じます。

これが逆戻りすることなく、より開かれた包摂社会に進んでいくことを期待します。



<来日直後のオリエンテーション (パスウェイズ・ジャパン提供)>



<キャリア研修 (©PJ/JICUF Koto Miura)>

「誰もが安心して住みたい街に住める世の中に」

大阪府枚方市在住 有限会社啓友エステート/ケアリンクハウスの^{うえやまたかこ}上山登子です。

先日、LED関西ファイナリストとして講演の機会をいただき、多くのご縁をいただきましたことに心より感謝申し上げます。

私は大阪府枚方市と交野市で不動産業を営んでおり、さまざまな事情で住居探しに困っている人々をサポートと空き家とのマッチングを図る事業「ケアリンクハウス」を運営しています。

少しでも多くの方に「この幸せの国だと言われる日本にも住むところがなくて困っている方がたくさんいるという事」を、そして「居住支援という活動」があることを知って頂けるために居住支援活動と周知の為の講演活動など行っております。

私たち不動産業の役割は、家を借りたい人と貸したい人を繋げることです。そして、その出会いが互いに豊かさを生み出すような形になるよう、私は事業を営んでいます。豊かさとは一体何でしょうか？私は現在、三人の子どもを育てるシングルマザーであり、不動産業を18年間営んでいます。私の子供には障がいがあり、引きこもりの生活を送っています。それでも、私たちは普通の生活を送れると言える家に住んでいます。しかし、私には大きな不安があります。それは、私が亡くなった後、子どもたちがどうなるのかということです。不動産業を営んでいると、時折、私たちの力不足を感じるがあります。

家賃の滞納や近隣トラブル、孤独死など、リスクも存在し、家を借りたいのに借りることができない人々がたくさんいます。私たち不動産業の役割は、家を借りたい人と貸したい人を繋げることであり、その結果として豊かさを生み出すことです。

しかしこの課題を抱えている人々が、全国にたくさんいるのが現実なのです。

私は、ある18歳の女の子と出会い、その深刻な状況に気づかされました。彼女は幼少期から家に閉じこめられ、学校にも行けませんでした。逃げるように私のもとにやってきました。彼女は親の世界しか知らず、自立するためには大きな壁を乗り越えなければならない状況でした。彼女の生活を支援し、自立をサポートする中で、適切に関わる人々が彼女の自立や成長を実現させることができることを知りました。これが私の不動産業としてとどろいた使命です。

私の使命は、住みたい人々が公平な機会を持って住めるように支援することです。私たちの居住支援活動の思いをたくさんの方に知っていただき、一人一人ができることへの少しでもご協力をいただけるサポーターを募集しています。

※以下の活動にご協力いただける方を募集しています：

- 居住支援活動への参加：空室や空き家の所有者をサポートします。
 - 講演依頼：居住支援活動を広めるための講演を行います。
 - 物品の寄付：使わなくなった家具、家電、自転車などを頂けると助かります。
 - サポーターとしてのご加入：月額1,000円～の食料や転居費用などでのサポートをお願いしています。
- ご興味のある方は、以下の連絡先までお気軽にお問い合わせください：

皆様からのご支援に心より感謝申し上げます。

ケアリンクハウスに関する詳細は、ホームページ (<https://care-link-house.com>) をご覧ください。



有限会社啓友エステート
代表者 上山 登子
(090-4306-5185)

障がいのある方から言われて「嬉しかった言葉」ベスト3

こんにちは、一般社団法人Possibleの松本です。LED関西10期のファイナリストとして、5月の交流会で登壇にさせていただきました。

加えて、今回のてんこもり8月号の寄稿の機会をいただきありがとうございます。

私は現在、就労継続支援事業所を東梅田と西天満で1店舗ずつ運営しております。

そこに所属している障がいのある方は現在50名を超え、みんなで毎日動画編集をしたり、SNSの分析をしたり、撮影をしたり、カフェの接客をしたり。日々色々なお仕事をみんなと一緒にしております。そうすると、多くの方から「障がいのある方50名と一緒に働くの大変ですね〜すごいですね!」と言われることが多いです。ですが、私自身は大変だと思ったことは少なく、むしろ一緒に働くみんなに助けられることが多いです。ということで今日は、一緒に働くメンバーから言われて嬉しかった言葉ベスト3を勝手ながら紹介させていただきます。

・ベスト3

「僕の友達に職場紹介してもいいですか？」 これは、高次機能障害を持つ20代の男性が言ってくれた言葉です。

彼は高次機能障害のため、手足を動かすことは難しく、日常生活は家族やヘルパーさんのサポートが必要です。ですが、話すことに関しては、ゆっくりであれば話すことができます。そのため、現在は、スマートフォンに元々備わっている“音声入力”の機能を使って、SNSの企画や、台本制作をしてくれています。そんな彼が、自分が働いていることを誇りに思い、その職場に自信をもって周りに薦められていること。それは紛れもなく、一緒に働いてくれているスタッフやメンバーが作ってくれた環境があったからに違いありません。一人では環境を作れないからこそ、チーム一丸となって、この環境を大切に育てていきたいと改めて思いました。

・ベスト2

「働ける場所を作ってくれたことに感謝です」自分が普通に働けること、当たり前のように職業を選べるのがどれほど、恵まれているかを実感させられた言葉です。その方は30代の車いすユーザーで中途失聴の女性です。車いすだから。耳が聞こえないから。と、接客の仕事をするのはあきらめていたそうです。そんな時に、車いすユーザーでも、耳が聞こえなくても、接客の仕事ができるんだということで、Instagramを通じて、スタッフの応募をしてくれました。彼女のその言葉があるからこそ、改めてあって当たり前なものはないし、働けること、自由に職を選べることに感謝が必要だと強く感じました。

・ベスト1

「夢がかないました」これは聴覚障がいをもつカフェの女性スタッフがお客さんにふと放った一言です。

カフェでは手話教室というものを行っており、生徒さんからそのスタッフに「先生の夢はありますか？」と聞かれていました。その時彼女は「あります！でももう叶いました！」と答えていました。私は何だろう？と思ってこっそり聞き耳を立てていました。そこで生徒さんが「先生の夢は何ですか？」と聞くと「接客をすることです」と彼女がこたえていたんです。その時、障がいを理由に自分の夢をあきらめている人が日本にもまだたくさんいるのではないかと感じました。ただ、彼女がそうやって周りに自分の夢が叶ったと伝えたり、生き生きと働く姿を見せることで、次の世代への可能性になるのではないかなと感じました。自分自身の夢を叶えるだけでなく、それを周りに発信している彼女を見て、可能性を周りにあたえていく彼女をすごく頼もしく感じました。

以上勝手ながら、私が会社を立ててスタッフから教わったことであり、嬉しかったエピソードです。まだまだありますが、また次の機会にお話しさせていただければ幸いです。

周りで生きづらさを抱えていたり、働きづらさを抱えている方がいらっしゃいましたら、ぜひ一度見学にお越しください。

一般社団法人Possible代表理事 松本晴夏



(耳が聞こえないメンバーが働く
清浄カフェのスタッフ)

まだまだ暑さ厳しき折、皆様には一層のご健勝を心よりお祈りいたします。

(一財)VEC 関西支部長 山脇 雅則

一般財団法人 ベンチャーエンタープライズセンター関西支部
〒541-0053 大阪市中央区本町2-3-6 本町ビジネスビル9階
TEL 06-6263-0366 FAX 06-4964-6293 Eメール shib88@vec.or.jp